

# 大丈夫よ！ お母さん！

vol.35

教育コーディネーター 中西美沙子

（今回のテーマ）  
小さき者の声

子どもたちの声を聞かなくなったのは、いつの頃からでしょう。かつてはどの町にも、公園や隠れ家のような場所がありました。子どもたちの歓声や笑い声が、大人たちをも元気にしていました。

「失くした時」を懐かしむのではなく、消えてしまった子どもたちの声の「より処」はどうなったのかと、ふと思ってしまうことがあります。

日本は豊かになりました。不況といわれつつも、スーパーやデパートを見れば「物」はあふれるようにあります。しかしその豊かさの陰には、「子どもの貧困」があり、それが急速に増えています。食パン1切れで1日を過ごす子やイジメで亡くなった子どもたちが、よくニュースになります。その負の世界は、家族の形が変わったことと関わりがあるようです。そんな出来事から、今の時代の「孤立」を感じます。「孤立」は「孤立させる社会」があるからで、互いに支え合うという普通

を、日本人は失いつつあるのでしょうか。

豊かな家庭の子どももまた、「孤立」しているといえます。子どもの心がギスギスしていると思えることが多くなったことから、それはわかります。その理由は、競争社会の影響だけではなく、「家族のあり方」に根があるようです。家族の仲は良いのに、友だちとうまくいかない子がいます。それは「自分の家族だけが大切」と考え、「家族の殻」にたてこもることから問題かもしれません。ぬくぬくした「家族の殻」の中、外からやってくるものを排除するという傾向が、現代では普通になっているのでしょうか。家族を「守ること」と他者と「ともにあること」は、同じ地平に立たなければ、人は孤立してゆくのに。民俗学で有名な柳田国男は『小さき者の声』というエッセーで、子どもの世界について、現代の私たちを示唆するような言葉をいっています。「自分の知らぬ物から回避したがる大人物が、かえってさまざま

根なし草の種を蒔（ま）くの反して、いまだ耕されざる自然の野には、人に由緒のない何物も生長せぬという道理を、かつて立ち留って考えてみた者がありましたろうか」。

子どもが持つている可能性は、どれだけ勉強ができるかというような合理性ではなく、大人にとって一見意味のなさそうな、不思議で好奇あふれるものに引かれる側面です。そこを育てることだと、柳田はいつているのです。その言葉の後に、「自分の子ども時代をさかのぼってたどってみれば、何が重要かわかる」というようなことも語っています。

「小さき者の声」は、「家族の殻」を破ることで生まれる未来のようです。その力を支えるのが、本当の家族だといえます。浜名湖の北の方から、私の教室にやってくる小学生がいます。お父さんかお母さんが連れてくるのですが、彼女の無邪気な顔の表情に、いつも爽やかな風を感じます。誰とも等しく交わり、差別も嫌な言葉もいっただけありません。学校の友だちと遊ぶ話をよくしてくれます。そんなとき、この子は生きていくのが楽しいのだと、うれしさがわきます。

ご両親が歴史に興味があり、よく家族であちらこちら旅をするそうです。親の興味が子どもにも自然と染まる。その好奇心が子どもの感受性を育てるのだと感じます。「小さき者の声」は、聴こうとすれば、いつでも聴こえてくるのです。



## Profile

教育コーディネーター  
中西美沙子

静岡大学客員教授。文章教室「スコール」画廊「キューブブルー」などを主宰。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

☎ tel 053-456-3770

中西美沙子

検索

ピアノシモでね  
中西美沙子 著

著書の「ピアノシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）  
※お求めは浜松市内の谷島屋で。